

二〇一九年度 卒業論文

現代における日本人の宗教意識と伝道者の役割

L 1 6 0 1 2 8

脇坂大輝

目次

序論	1
本論	2
第一章 宗教とは	2
第一節 宗教の定義	2
第二節 宗教の役割	5
第二章 現代日本人の宗教意識	8
第一節 現代日本人の宗教意識のルーツ	8
第二節 現代日本人の宗教意識とその構造	9
第三章 浄土真宗における伝道活動	13
第一節 伝道活動とは	13
第二節 伝道活動の課題	15
第三節 僧侶・寺院の課題	17
第四章 現代における伝道活動の事例と今後の展望	19
第一節 伝道方法の検討	19
第二節 伝道活動の事例とこれからの伝道	22

結論 26

註

参考文献 · U R L

序論

現代日本人の日常生活を覗くと、日本という国には様々な宗教が混在していることがわかる。十二月二十四日頃には街がクリスマスのイルミネーションに包まれ、大晦日の夜は寺で除夜の鐘をつき、年始には神社へ初詣。葬式では僧侶を呼び、宗教用語を日常会話で用いる、といった具合である。しかし、これだけ宗教に囲まれた生活を送りながら、日本人には「私は無宗教だ」と言う者も少なくない。

私は、龍谷大学で学んでいく中で、「伝道」という言葉を初めて知った。「ジッセンジャープロジェクト」¹というヒーローショーを楽しみながら仏教にふれることができる取り組みや、街中で道行く人の愚痴を聞く「グチコレ」など、浄土真宗の伝道が非常に多様な方法で行われているということに関心を持った。しかし、宗教に囲まれた生活を送りながらも、無宗教を唱える傾向がある日本人の宗教意識への疑問は解消されないままであった。

日本人にとっての宗教の存在意義や、日本人が求める宗教のすがたを明らかにすることが、今日の伝道活動により活性化させるうえで必要であると考えた。本考察では、日本人の宗教意識が成立した背景の確認や、宗教意識調査の分析などを通して、現代日本人に必要なとされる宗教のすがたを探っていく。そして、活動の事例をとりあげながら、これからの伝道活動をより活発で意義のあるものにするための課題や留意点を考察していく。

第一章「宗教とは」では、日本において宗教という言葉が用いられるに至った経緯や、言葉の定義に関する先行研究を踏まえた上で、本考察における宗教という言葉の定義を明確にする。そして、現代日本において宗教が

果たしている役割を大きく三つに分類し、具体例とともに確認していく。第二章「現代日本人の宗教意識」では、宗教には様々な役割がある中で、現代日本人は宗教をどのようにとらえているのかを見ていく。考察の際には、宗教意識の他に、信仰の有無や人間関係観などの調査結果を交え、現代日本人の宗教意識の実態を把握し、伝道活動を検討する際の手がかりとする。第三章「浄土真宗における伝道活動」では、浄土真宗における伝道活動の定義に関する先行研究を踏まえ、本考察において用いる伝道活動の定義を明らかにする。そして、現代における伝道活動の課題点や、伝道者に求められる姿勢をとりあげる。第四章「現代における伝道者の役割」では、伝道活動を検討する際に抑えておくべき四つのポイントをとりあげ、伝道活動の事例と照らし合わせながら、活動の改善点や参考にすべき点を分析し、今後の伝道活動の模範的なすがたを探っていく。

本論

第一章 宗教とは

第一節 宗教の定義

本考察における宗教の定義を明らかにするにあたって、まずは、現代の日本で用いられている宗教という言葉が誕生した経緯を振り返ることにしよう。宗教という言葉が、「religion」の訳語として使用されるようになった

のは、明治時代に入ってからのことである。明治以前は、「仏教の宗派のいずれか」として、宗教という言葉が用いられていた²。日本において「宗教(religion)」という概念が誕生するに至ったターニングポイントは、慶応三年十二月九日の王政復古政変であるとされている。明治天皇は、かつて神武天皇の時代に行われていた、祭祀と政治が融合した祭政一致の体制をめざした。その実現のため、千年以上にわたって存在した信仰形態である神仏習合が撤廃され、神道の国教化が進められた。これとともに、「宗教(religion)」という概念が日本に誕生した³。

江戸時代までは、あくまで仏教の宗派のいずれかを意味する言葉だったが、神仏分離を機に、「仏教の宗派のいずれか」という限定がなくなり、のちに信教の自由が掲げられたことや、宗教法人法の施行などもあり、日本国内における宗教という言葉がさす範囲は、時代とともにきわめて広くなっていった。

文化庁の宗教年鑑平成三〇年版によると、日本国内には一八一二五二法人もの宗教法人が存在する⁴。もちろん、日本国内だけではなく、世界には膨大な数の宗教・信仰が存在する。実に膨大な数と多様性をもつ宗教だが、包括的な定義は存在するのだろうか。

宗教の定義については、井上順孝氏によると、宗教学において長年議論されてきたが、統一的なものではなく、着眼点が異なれば定義も異なってくるものであるとされており⁵、ジョン・P・ヒネルズ氏によると、

その定義が何であれ、宗教とはこの『事典』のほとんどの用語を含み、この『事典』のほとんどの用語の内
に含まれているものである。いかなる単一・単純な定義も十分ではないだろう。(中略)宗教性は、必ずしも

宗教上の信仰を告白し、宗教的慣行に従事する人々だけが有するわけではないということに、留意しなければならぬ。(中略)より抽象的な用語として用いられる場合、**宗教**、ということばには以下の意味がある。(中略)(d)制度や伝統の内(明示的宗教)のみならず、生活様式の内にも隠れた形で存在する(潜在的)宗教性とされている。以上のように、宗教の定義には包括的なものがなく、定義づける際の着眼点によって変わるものであるということが分かる。

序論でも軽く触れたが、宗教の一面として、(a)「年中行事・日常会話・文化などに自然と溶け込んでいる潜在的なもの」が挙げられる。潜在的であるので、先に引用したジョン氏の『世界宗教事典』にあるように、信仰告白をしていなかったり、教団へ所属していない者であっても、無自覚のうちに宗教性をもっているという場合もある。自覚的に宗教性をもっていなかったとしても、「大袈裟」「他力本願」などの仏教用語を日常生活の中で用いたり、クリスマスを楽しむ人もいれば、お守りを求めて神社へ足を運ぶ人だっている。宗教性とは、決して宗教者や信者のみが抱くものではなく、知らず知らずのうちに、誰もが関わりをもっているものであるといえる。さらに宗教には、(b)「スピリチュアルな領域への関与ができるもの」という特徴がある。ここでのスピリチュアルな領域とは、主に仏教でいうところの生老病死の問題である。友久久雄氏は、人間の悩みには「人間として生まれた限り避けることができない、自己の死に対する悩み」と「日常生活を営む上での悩み」の二つを挙げている。後者は人間の努力によって解決することができるが、前者は人間である以上、誰もがもっている生老病死の悩みであり、人間の努力では解決が困難であるとされる⁷⁾。後者の解決に関わる可能性も宗教にはあるが、

注目すべきなのは、人間の努力では解決することが困難な生老病死の問題に宗教が関与することができるといふ点だろう。

また、本考察では、伝道活動の課題や事例の検討について論を展開する関係上、(c)「教義・教団・聖典を何らかの形で持ち、聖典に基づく教義を伝えひろめるための伝道という課題をもつもの」としての宗教を扱う。以上の三つの要素を踏まえ、「日常生活に溶け込んでいるがゆえに、無自覚、または潜在的であったりするが、人間の先天的な苦しみの解決に関わり、伝道という課題をもつもの」を、本考察における宗教の定義とする。

第二節 宗教の役割

ここでは、第一節で設けた宗教の定義に関連する、現代における宗教の役割として、①「社会的習俗・儀礼・文化の一部としての役割」、②「心の問題に関わる役割」、③「場所を提供する役割」の三つをとりあげる。①「社会的習俗・儀礼・文化の一部としての役割」には、冠婚葬祭に携わる宗教、クリスマスなどの年中行事、さらには、日常会話で用いる宗教用語などが該当する。井上順孝氏は、海外の事例として、ヨーロッパではキリスト教文化が自然と日常生活に溶け込んでおり、レオナルドダヴィンチの「最後の晩餐」が教会に描かれていたり、小説や映画の題材になっていることから、「最後の晩餐」がキリスト教にとって重要な意味をもつことが文化的に共有されている例を挙げている¹⁰。日本国内でも、映画『おくりびと』¹¹では納棺師の姿が、テレビアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』¹²では、キリスト教がモチーフとされている要素が含まれているなど、映画や小説以外に

も、テレビアニメなどのサブカルチャーにも宗教的な要素が潜んでいる場合がある。作品内の宗教的要素が物語の展開を予測するうえでのヒントとなる場合も多く、「考察」と呼ばれる行為がネット上の掲示板サイトやSNSでは盛んに行われている。このことは、宗教が文化の一部として受け入れられている好例であるといえる。

② 「心の問題に関わる役割」とは、日常生活の悩みのみならず、人間が先天的にもつ生老病死の苦しみの解決に関わる役割である。仏教教団の関与が進められている分野として、災害支援、緩和ケアなどさまざまなものが挙げられるが、これらの社会活動には、宗教的な次元があり、科学や合理主義的な思考では補いきれないスピリチュアルな次元を担うことができる。災害や自死によつて大切な人を失ったとき、残された人は「死んだ家族はどこへ行くのか」、「これからどうやって生きていけばいいのか」と考える。その人たちの心に寄り添うとき、科学や合理主義的な思想だけでは、「死んだ人は灰になって終わり」だとか、「死んだ人は還つてこないのだから、くよくよしても仕方がない」などといった、あまりにも冷たい接し方になってしまふだろう。いっぽうで、宗教における死後の世界観や思想は、悲しみのただなかにいる人にとつては、今後の生き方を示し、心の支えとなる。死別の悲しみの他にも、現代ならではの心の問題もある。情報社会といわれる世の中において、SNSやインターネットといった情報ツールの普及は、情報収集や、人と人とのつながりを容易にした。しかし、便利さの反面、情報過多の社会や人間関係のストレス、ネット依存、ひきこもりなどといった社会問題も生まれた。加藤智見氏によると、現代の若者は、膨大な量の情報にひっぱりまわされており、経済至上主義的な現代では、自身の評価を高めることを強いられ、他人への思いやりなどといった、自分の価値観以外への肯定的な発想が薄れてい

ることを指摘している。また、この現状に対して、仏教における自身を含め他の人間、あらゆる命に仏性が与えられていると考える思想が、若者だけに限定せず、閉塞した現代社会に必要なものだと主張している¹²。

近年、「生きづらさ」という言葉をたびたび耳にするようになったが、その原因の一つとして、経済至上主義的・合理主義的な思想のもと成り立っている社会そのものが挙げられるだろう。競争が激しく、どうしても自己中心的になりがちな現代日本人だが、加藤氏が主張しているような「おたがいさま」の関係を他者と生み出していくことが、「生きやすい」社会づくりの一助となることが期待できる。

「③場所を提供する役割」とは、寺をイベントの会場や地域住民の集いの場とすることで、サードプレイス(以下、TPと表記)、ソーシャルキャピタル(以下、SCと表記)を提供する役割である。SCとは社会関係資本と訳され、星野哲氏は「人々の豊かなつながりは信頼を生み、「お互い様」の関係をづくり、社会にとっても良いこと、という意味合いだ」と説明している¹³。SCを提供する寺院や宗教施設が増えることで、②で述べたような、「おたがいさま」の関係が生まれ、「生きやすい」社会への第一歩となることが期待できる。TPとは、家でも職場でもない第三の居場所のことで、提唱者のレイ・オルデンバーグは、良いTPの特徴として、誰もが自由に出入りするこ
とができる・楽しく会話ができる・常連がいて、新しい参加者ともフレンドリーな雰囲気をつくる・精神的な快適さや支援をしてくれるもう一つの家のような場所などを挙げている¹⁴。

著者は、寺院こそが、このSCやTPにうってつけの場所であると考ええる。寺院は基本的に無償で出入りすることが可能で、気軽に足を運ぶことができる。楽しく会話をしたり精神的に快適な空間を提供できるかはその寺院

の運営者の手腕に委ねられるが、寺院という宗教的・非日常的空間さえあれば、あとは運営者のアイデア次第で SC・TPとしての寺院の可能性は無限大であるともいえる。

第二章 現代日本人の宗教意識

第一節 現代日本人の宗教意識のルーツ

これまで述べてきたように、宗教には様々な役割が存在するが、現代の日本人は、宗教をどのように受け止めているのだろうか。よりよい伝道活動を検討するうえで、現代日本人の宗教意識の把握は必要不可欠である。寺川幽芳氏は、遺跡の埋葬法や日本神話の世界観からも、日本人が古くから抱いてきた死生観・宗教観が見えてくるとしている。三内丸山遺跡では、遺体が道側に足を向けて葬られており、両側の遺体が立ち上がると道をはさんで対面するかたちになっている。このことは、死者の世界が生者の世界と異なる他界であるにもかかわらず、常に生者とのかわりをもつ現世に存在しており、集落の住人たちは常に先祖である死者たちに見守られていたことを意味している。また、日本神話ではタジマモリが常世の国に赴いたように、生身の人間が行き来できる世界であり、常世の国は現世の連続地となっている¹⁾。このことから、古くから日本においては現世と他界とのギャップが小さく、現世中心の思想が存在していたことが分かる。

他に、加藤智見氏は、日本人の宗教心とは、四季による自然の移ろいをはじめとした自然の恵みに対する感謝

の念の蓄積によって醸成されたものであるとしている。災害を起こす神でさえ祈りの対象とする日本人の宗教心は、他国の宗教心と比較した際に異彩を放つものであると加藤氏は指摘している¹⁶。他国の宗教意識と比較し、日本人は宗教が混在した生活を送っており、宗教意識が低いという指摘がされることもある。しかし加藤氏は、欧米人の信仰などと比較した際、宗教の内容はもちろん、宗教が成立した歴史や宗教観・宗教意識の構造が異なっているだけで、決して日本人の宗教心が希薄というわけではないと主張している¹⁷。国によって歩んできた歴史が違うことで、文化や習慣が異なっているように、宗教に対する考え方も国によってさまざまである。日本人は宗教に対して節操がないわけではなく、日本人らしく歩んできた歴史の積み重ねによって現在の宗教意識・宗教観が誕生したといえる。

第二節 現代日本人の宗教意識とその構造

日本人の宗教意識・宗教観は日本の歴史の中で確かに醸成されてきたものであるということは先に述べた通りだが、現代において、日本人がどのような宗教意識・宗教観をもっているのかを改めて分析することは、今日におけるよりよい伝道活動を検討するうえで欠かすことのできない作業である。真宗教団連合による第二回浄土真宗に関する実態把握調査¹⁸「信仰する宗教(SQ三)」の「一般」の調査結果では、「宗派名が分からないが仏教」が七・四%、「宗派にこだわりはないが仏教」では六・四%、「とくに信仰または所属しているものはない」が五・四%となった。「仏教以外の宗教」の「一般」三・八%を差し引いても、これら三つの項目を合計した割合が

「一般」で六九・二%という結果になっている。「一般」では、七割近くが宗教を信仰していなかったり、どの宗派に所属しているのかということに無関心であることが読み取れる。

また、NHKの「日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか」ISSP国際比較調査「宗教」・日本の結果から「¹⁾」においても、類似した結果が読み取れる。「信仰している宗教」という調査では、「ふだん信仰している宗教はありますか」という質問に加え、「冠婚葬祭の時だけの宗教でなく、あくまで、あなたご自身が、ふだん信仰している宗教をお答えください。」という但し書きが加えられた質問の結果が出ている。二〇〇八年と二〇一八年の同調査の結果が比較されているが、内訳にほとんど変化は見られない。二〇〇八年では、仏教…三%、神道…三%、キリスト教…一%、信仰宗教なし…六一%という結果で、二〇一八年では仏教…三一%、神道…三%、キリスト教…一%、信仰宗教なし…六二%という結果になっている。真宗教団連合の調査結果と同様、信仰をもっていなかったり、所属する宗派に無関心な人の割合は六〇七割程度となっている。

また、冠婚葬祭や年中行事に含まれる宗教性と、教団への所属や信仰をとまなう宗教との線引きを日本人がどのようにしているのかについて、クリスチャン・サイエンス・モニター紙は、六二%もの日本人が信仰をもっていないとしながら、多くの人が寺社仏閣に参拝している現状について、神社へのお詣りなどは、現世利益的な効果を期待して行っている場合が多く、神社へお詣りすることと宗教の信仰は別物であり、宗教が慣習の一部として存在し、聖と俗が分かちがたい状況にあると指摘している²⁾。

NHK放送文化研究所による第九回日本人の意識調査では、一九七三年から二〇一三年にかけての「日本人が

信じるもの」の変化が年齢別で示されている²¹。「(第二八問)宗教とか信仰とかに關係すると思われることがらで、あなたが信じているものがありますか(複数回答)」において、ここでは、現世利益的な面が強いと考えられる「お守り・おふだの力」と「奇跡」の二項目の調査結果と五年ごとの変化を中心に見ていく。一九七三年と比較すると、二〇一三年では、「お守り・おふだの力」が一四%から一七%へ、「奇跡」は一三%から一六%と、わずかではあるが、ともに三%増加している。この二項目に関しては、二〇〇三年から二〇〇八年にかけて前者は二%増加、後者は三%増加している。二〇〇三年から二〇〇五年にかけては、「スピリチュアル」という言葉が流行し、テレビ番組でもオカルト的な内容に関連したものが流行ったが、その影響によるものだとNHK放送文化研究所は分析している。その後二〇一三年では、「お守り・おふだの力」は二〇〇八年と比較すると一七%と変化がなく、「奇跡」は二%減の一六%となっており、スピリチュアルブーム期の二〇〇八年と比べると減少しているものの、二〇〇八年の結果に次いで高い該当率となっている。また、この二項目は二〇一三年における年齢別の調査結果も出ている。「若年層(一六〜二九歳)」「中年層(三〇〜五九歳)」「高年層(六〇歳以上)」の三つの年齢別の結果では、「お守り・おふだの力」が「若年層」二七%、「中年層」一九%、「高年層」一二%、「奇跡」が「若年層」三七%、「中年層」二一%、「高年層」七%と、若年層に近づくほど、現世利益的な二項目の該当率が高くなっている。いっぽうで、「仏」「神」の二項目では、「仏」は「若年層」一六%、「中年層」三五%、「高年層」五四%、「神」は「若年層」二二%、「中年層」二九%、「高年層」三七%と、「お守り・おふだの力」と「奇跡」とは真逆の、高年層に近づくほど該当率が高いという結果になっている。NHK放送文化研究所は、

以上の結果は年齢の違いによる影響よりも、世代の違いが大きく影響していると分析している。世代によって宗教の捉え方や信じているものも異なっていることから、伝道者は世代ごとに受け入れられやすい内容の伝道活動を行っていく必要がある。

また、近頃は御朱印めぐりをする若者も多く、文房具店では何種類もの御朱印長が陳列されているのを見かける。他にも、神社や寺の敷地内にある庭園や建造物の写真を撮り、いわゆる「インスタ映え」する写真を撮影し、SNSに投稿している若者も多い。この現状は、伝道者や宗教者の立場に立つと、「宗教に親しみをもってくれている」や、「寺院に足を運ぶ人が増えたので、寺院での活動が認知されやすくなった」というプラスな状況と捉えることができる。一方で、「本来の宗教の役割や教義がおろそかになっている」や、「現世利益的な」とばかりに目が行ってしまい、浄土などの宗教特有の他界観や、神や仏といった宗教における中心的存在への感覚が薄れ、宗教が形骸化する」などといったマイナスな捉え方もできる。しかし、少し意味合いが異なるとはいえ、SCやTPを提供する可能性が寺院という場にあるということは先に述べた通りであり、そのような場を提供する寺院に需要があると考えられる、次のような調査結果がある。

真宗教団連合による浄土真宗に関する実態把握調査²²の「Q13…人間関係観」においては、「全体」で最も多かったのが「他者との関係づくりは大切である」の六七・六%となっている反面、「自分の内面的なことはなるべく踏み込まれたくない」が五五・七%となっており、他者との関係づくりが大切だと感じながら、深い関係にはなりたくないという現代日本人の複雑な人間関係観が見えてくる。しかし、オルデンバーグが良い²³の特

徴として、気軽に出入りしたり、フレンドリーに会話できる場所としていたように、敷居の低い、理想的な「づくり」に寺院が取り組むことで、程よい人間関係をうみだす場として需要が出てくるのではないだろうか。また、同調査において、全体での該当者は九・五%と少ないが、「インターネットやSNSの中では本音を出せる」に該当する割合は二〇代が「一般」で一八・八%、「真宗一〇派」で二二・八%とそれぞれ他の世代と比べて最も多いというのも注目すべき点である。匿名性が確保され、本音を出せる場であるインターネットやSNSでの宗教の活躍が若者に求められる時代になったといえる。現実には存在する宗教施設としてSCやTPを提供するだけではなく、ネット上にも「TP」に続く第四の居場所を提供することが宗教に期待されていると考えられる。

第三章 浄土真宗における伝道活動

第一節 伝道活動とは

そもそも「伝道」とは、キリスト教における「mission」が原語で、「教旨を伝え宣べて未信者に入信を促すこと」を意味しており、キリスト教では教団の使命として位置付けられているが、仏教教団における伝道は「派遣や使命」としての位置付けではなく、「教えを伝え、広める」という広い意味で用いられてきた。浄土真宗においても、かつては伝道よりも布教という言葉が定着していたが、布教は説法や説教に近い意味なので、包括的に「教えを伝え、広める」ことを表す場合は伝道という言葉が用いられている。現代でこそ、多種多様な伝道活動

が各地で精力的に行われているが、かつて真宗学は、伝統的には教義学を中心に行ってきた。しかし、近代以降になると、哲学など他分野の方法が取り入れられるようになり、真宗学においても社会の要請に応じることも求められるようになり、伝道が重視されるようになったという経緯がある²³。

深川宣暢氏は伝道の定義について、「浄土真宗における宗教的真実およびその表現は十方衆生の救済のために行われるものであり、「真宗の伝道」とは、「浄土真宗の教法およびその救済を伝え、広めること」であるとしている²⁴。また、葛野洋明氏は、真宗の伝道活動とは、阿弥陀如来を中心とした宗教的空間において、読経や礼拝、説法や聴聞などをもって、ともに阿弥陀如来の仏徳を讃嘆することであるとしている。他に、伝道の主体や構造について、親鸞が「信文類」別序に「夫以 獲得信樂發起自如來選択願心（それおもんみれば、信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起す）」と述べ、「言信心者則本願力廻向之信心也（信心といふは、すなはち本願力回向の信心なり）」とも述べていることを挙げ、伝道する者が伝道される者に信心を与えるのではなく、伝道する者が阿弥陀如来の本願の救いを仰ぎ、その仏徳を讃嘆するという構造になっていることを葛野氏は主張している。また、その仏徳讃嘆を聞く者が、共に阿弥陀如来の本願の救いを仰ぎ、同じように仏徳讃嘆することになるとき、すなわち、「法が伝わったとき」、そこに伝道が行われたということになるとしている²⁵。

法とは人が人に「伝える」のではなく、仏のはたらきを共によるこぶことよって「伝わる」ものであるということを伝道者は忘れてはならない。「伝える」伝道、上から目線の伝道では、決して被伝道者の心に響かないだろう。伝道する者も、伝道される者も、仏法を聴聞し喜ばせていただく仲間、すなわち「同朋・同行」となって

いこうという姿勢を厳守しなければならない。深川氏と葛野氏の研究を踏まえ、本考察では、「同朋・同行の間となつて、阿弥陀仏の仏徳を讃嘆し、浄土真宗のみ教えを聴聞すること」を真宗における伝道の定義としたい。

第二節 伝道活動の課題

伝道活動は、伝道する者と伝道される者の二者がいて初めて成立するものである。ネットを活用した伝道、今風の取り組みなど、時代のニーズに影響され、伝道活動の形は変遷してきた²⁶。また、時代に即した活動が求められると同時に、時代の違いによつても伝道活動の留意点や課題は異なる。

寺川幽芳氏は、現代における伝道の課題として、鎌倉浄土教の祖師たちの教えを教条的に理解するあまりに、対機説法という仏教における伝道の原点を見失っていることを指摘している²⁷。時代によつて伝道活動のニーズや形が変化してきたことは先に述べた通りだが、あくまで仏教の伝道である以上、原点である釈尊の対機説法というシステムは時代に関係なく守られ続けるべきである。

また、葛野洋明氏は、①「専門用語の問題」、②「現実的課題との乖離」、③「伝道方法の検討」の三点を現代における伝道の課題として挙げている。①「専門用語の問題」では、昨今の伝道においては、「わかりやすく親しみやすい法話」が求められており、専門用語を扱う際には、日常語への置き換えや譬喩を用いるべきだという指摘もある。しかし、言葉の置き換えや譬喩では、その専門用語本来の意図を曖昧にし、誤解をうむ危険性もあると葛野氏は指摘している²⁸。この葛野氏が指摘している問題は、真宗教団連合の調査結果からも見えてくる。

真宗教団連合による第二回浄土真宗に関する実態把握調査²⁹における、真宗一〇派を対象とした「浄土真宗の言葉の認知」では、「他力(他力本願)」、「往生」、「悪人正機」という言葉について、「本来の意味を知っていた」、「本来の意味を知っていないつもりでいたが、違っていた」、「本来の意味は知らなかったが、言葉だけは知っている」、「この言葉知らない」の四つの選択肢から選ぶという形式がとられた。真宗一〇派のみが対象でありながら、「本来の意味を知っていた」が「他力(他力本願)」では二八・七%、「往生」では三〇・三%、「悪人正機」では一九・四%と、いずれも低い状況になっている。また、「悪人正機」に関しては、この三つの言葉の中でも全体での認知度が低く、「この言葉知らない」は全体で四〇・一%となった。「本来の意味は知らなかったが、言葉だけは知っていた」の調査結果を、「一般」と「真宗一〇派」を合わせた全体で見ると、「他力(他力本願)」では四三・八%、「往生」では四二・七%、「悪人正機」では二九・二%となっており、この原因としては、法話などで言葉を耳にすることはあっても、意味が十分に伝わっていない場合などが考えられる。

この問題に対して葛野氏は、浄土真宗の教義は、人間の知を超えた悟りのはたらきであり、安易な言葉の置き換えや譬喩を用いた説明によって「わかりやすく親しみやすい」ものになることはないとしている。しかし、自らが浄土真宗を自らの宗とする教えとして、その教えや専門用語が示す内容を的確に把握することで、日常語や譬喩・因縁を用いて「わかりやすく親しみやすい」布教伝道とすることも可能となり、その危険性にも気づくことができるとしている。創意工夫を凝らして伝道活動をしようとする姿勢は重要であるが、少しでも誤解を招くような表現があれば、間違った教えが広まる危険がある。そのようなことが起こらないよう、伝道者は教義・用

語の研鑽に努め、専門用語をよく咀嚼したうえでの説法・伝道を心掛けなければならない。

② 「現実的課題との乖離」では、「現実的課題に対する教学の構築をすべきである」という指摘もあるが、葛野氏は、ニーズに合わせた教学を構築することは、現実的課題に応えるために、仏教や浄土真宗の教えを「利用する」という方向性を取ることになり、仏教や浄土真宗の本来の教えから乖離し、誤解を与える可能性が大きいとしている。現実的課題に対して、直接的に言及されていないからといって、新しい教学を構築するのではなく、教学を基にして、現実的課題をどう位置づけ、どう対応するかを考えることが重要であると主張している。

③ 「伝道方法の検討」では、現代においては様々な伝道方法があるが、伝道方法が検討され続けているということは、従来の伝道方法が十全ではなく、反省する点があることを意味していると葛野氏は指摘している。しかし、伝道方法に十全なものがあるわけではないので、より深く法義を味わうために伝道方法を検討することを重視するべきだとしている。また、伝道方法の目新しさ、参加人数、会の規模など、期待される効果にのみ焦点をあてて、共に仏徳讃嘆するという布教伝道の本来の意味が疎かになっては意味がないとしている。

第三節 僧侶・寺院の課題

伝道活動そのものの課題点については第二節で取り上げたが、その伝道活動の拠点となる寺院や、模範的存在たるべき僧侶は、世間からはどのように評価されているのだろうか。真宗教団連合による浄土真宗に関する実態把握調査³⁰では、僧侶に対する評価に関連する調査として、「Q一八…僧侶に対するイメージ」と「Q三〇…僧侶

に対する不満」の二項目の調査結果が出ている。「Q一八…僧侶に対するイメージ」では、浄土真宗の僧侶に対するイメージとして、ポジティブなもの(A)と、ネガティブなもの(B)のどちらに多く分布しているかが表されている。「全体」での結果は、「親しみがある」が「Aに近い…七〇・三%」、「勉強熱心である」が「Aに近い…七九・四%」、「身だしなみが整っている」が「Aに近い…八八・〇%」など、全ての項目において七割～八割程度がポジティブなイメージに寄っている。

しかし、僧侶に対する不満の声もある。「Q三〇…僧侶に対する不満」では、僧侶に対して「肯定」的なイメージをもっているのは二・四%、「特にない・興味がない等」は六八・六%、「不満あり」が二八・九%となっている。「不満あり」の内訳としては、「行動、態度、姿勢に対する不満」が三四・六%と最も多く、「行動、態度、姿勢に対する不満(金銭、生活面)」の一九・一%や、「法話、教化、修学に対する不満」の一八・四%などが続いた。「行動、態度、姿勢に対する不満」では、具体的な不満の声として「上から目線」や「信頼できない」などが挙げられ、「法話、教化、修学に対する不満」の具体的な声としては、「勉強不足」「お経が下手」などが挙げた。僧侶に対して七～八割程度がポジティブなイメージをもっていることに安心せず、三割近くが不満をもっているということに危機感を感じるべきである。不満の声として挙げた「上から目線」は、本考察における伝道活動の定義に含まれる「同朋・同行」の姿勢に反するものであり、「信頼できない」は、伝道活動のみならず教団の信頼にも関わる重大な問題である。僧侶は法務や修学の他にも、私生活、人間性を見直す必要がある。

続いて、寺院に対する評価を見ていこう。「Q二九…寺院に対する不満」では、「肯定」が〇・九%、「特にない・

興味がない等」が六七・四％、「不満あり」が三一・七％となった。「不満あり」の内訳としては、最も多かったのが「お布施、寄付等に対する不満」の二九・八％、続いて「疎遠、近寄りがない」の二二・一％、「行動、態度、姿勢に対する不満」の一三・五％、「行動、態度、姿勢に対する不満(金銭・生活面)」の一・一％となった。最も多かった「お布施、寄付等に対する不満」の具体的な声としては、「金額が不明瞭」「寄附の回数が多い」などが挙げられた。また、金銭に対する不満の声として、「布施の額によって対応が違う」「贅沢」が挙げられた。「寺院に対する不満」の調査ではあるが、この調査結果は寺院を運営する僧侶への不満そのものであると考えるべきである。布施や寄付は「お気持ち」としての面が強く、具体的な金額を提示するのが難しいのも事実だが、そのことを理解してもらうために説明をすることはできる。寺院側が要求する金額があまりにも高額で、かつ何の説明もなされていないならば、僧侶と門徒との信頼関係にも影響が出てくるだろう。

第四章 現代における伝道活動の事例と今後の展望

第一節 伝道方法の検討

伝道方法を検討するにあたって、押さえておかなければならないポイントがある。ここでは、①場をどこに設定するか、②主な対象は誰か、③教義にそった内容か、④効果が期待され、継続性があるか、の四つを扱う。

①伝道の場合に関しては、大きく「a…寺院などの宗教施設内」、「b…宗教施設外」、「c…インターネット・S

NS上」の三つが考えられる。「a…寺院などの宗教施設内」における活動には、法座や施設内での縁日などが当てはまる。これらのメリットは、宗教施設内は非日常的空間だということである。加藤智見『見つめ直す日本人の宗教心』³¹において、現代では、科学では満たされない原始的な生命力を大切にしてきた祭りや仏事のような非日常的体験が必要であり、そのような体験によって心を浄化し自分を見つめなおすことができるとしているように、現代における伝道を検討するうえで、宗教施設がもつ宗教的・非日常性は大きな魅力となる。デメリットとしては、伝道活動を行っていることが外部から認知されづらい点、遠方に住んでいる人が参加しづらい点などが挙げられる。

「b…宗教施設外」における活動は、「グチコレ」³²や「坊主バー」³³などが当てはまる。「グチコレ」の場合は街頭での伝道、「坊主バー」では店舗での伝道となっている。街頭での伝道の最大のメリットは、やはり人目につきやすいという点である。著者は実際に駅の近くでグチコレの活動を見たことがある。駅周辺ということもあり、自然と多くの人の目にふれる。認知のされやすさという点は街頭での伝道の大きなメリットであるといえる。「坊主バー」などの店舗での伝道活動のメリットは、気軽に立ち寄ることができるという点である。バーの場合には、ただ飲酒目的で立ち寄ることも出来、寺院をはじめとする宗教施設のような緊張感も持たれづらい。ただ酒を飲みたい人は飲酒のみ、悩みごとがあれば僧侶のバーテンダーが相談に乗ってくれるという画期的なスタイルである。デメリットとしては、どちらも「面と向かった悩み相談」がメインの活動なので、匿名性が確保されないという点や、相談に乗じて宗教の勧誘をされないか、という警戒心を抱かせ得るといった点などが挙げられる。

続いて、「c…インターネット・SNS上」での伝道活動のメリットとデメリットを見ていこう。aのデメリットとして、「伝道活動を行っているという情報が外部から認知されづらい点」と「遠方に住んでいる人が参加しづらい点」を挙げ、bのデメリットとして、匿名性の確保という課題を挙げたが、インターネット・SNS上での伝道は、これらの課題を容易に解消することができる。インターネットやSNSの、場所を問わずに情報を発信・拡散できるという特徴は、地方の寺院などのように、伝道活動の宣伝において不利な場所にとっては強い味方となる。また、インターネットやSNS上で伝道活動を行うことで、匿名性が確保されるため、気軽に悩み相談ができるほか、伝道者とのやりとりに要する時間と場所の制限が大幅に軽減されるのも強みである。デメリットとして考えられるのは、匿名性は情報を発信する伝道者側にも確保されている以上、そのことを悪用して強引に宗教の勧誘をしたり、誤った教えを広めるといった事態を引き起こしうる点や、個人差があるとはいえ、年齢や世代によってネットを利用する能力の格差、デジタル・デバイドが生じる可能性がある。第二章の第二節でとりあげた真宗教団連合による調査においても、インターネットやSNSの中では本音を出せるという割合も二〇代が他の世代と比べて多かったことから、インターネット・SNS活用による効果には、世代間の格差があると考えられる。cは魅力的なメリットも多くある一方で、伝道の対象をある程度限定してしまうというデメリットもある。

また、②に示した通り、メインターゲットを明確にする必要もある。若者向け・保護者向け・子供向けのほか、料理が好きな人向けなど、様々なパターンが考えられる。万人向けの活動とは違い、ターゲットを限定すること

によって、自然と参加者間に共通点が生じ、参加者同士の距離感が縮まり、誘い合っでの参加が期待できる。

③と④に関しては、葛野洋明氏が、『寺院活動事例集ひろがるお寺く寺院の活性化に向けて』において、イベントのアイデアが浮かんでも、肝心な仏教の教えが伝わらなかつたり(イベントへの参加者がいても、イベントに付随する法要や法話に参加しないなど)、一過性で継続しないものそのまま終わってしまったてはいけないとしており^{3,4}、確かにイベントの奇抜さや目新しさは、注目を浴びたり興味を惹きつけるという点では有効な要素だが、伝道活動の定義にも、「同朋・同行の仲間とともに、阿弥陀仏の仏徳を讃嘆し、浄土真宗のみ教えを聴聞すること」と示したように、阿弥陀仏の仏徳の讃嘆・浄土真宗のみ教えの聴聞が浄土真宗における伝道活動の大前提なので、それらを欠いた活動はただのイベントに終止してしまふ。継続性に関しては、活動内容によっては継続的・定期的に開催することが困難な場合もあるので、必須条件とまでは言えない点ではある。しかし、参加者たちが定期的に寺院へ足を運ぶ機会や仏教の教えにふれることができる機会を提供するという意味では、継続性があるほうが望ましいことは明らかである。また、継続性があることで参加者に馴染みの顔ぶれが生まれ、寺院が「PやS」となることも期待できる。

第二節 伝道活動の事例とこれからの伝道

第一章の第二節では、宗教の役割のひとつとして、「場所を提供する役割」を挙げた。寺院の場合、一言に「場」と言ってもさまざまな面をもっている。ここでは、①「非日常的・宗教的空間、聴聞の場、悲しみの場」と、②

「イベント会場、TP・SCとしての場」の二つに分類する。本考察では便宜上、この二つの面に分類して論述するが、この寺院の二面性は表裏一体の状態となっていることが望ましいと著者は考える。①の機能は寺院である以上、ほぼすべての寺院がもつものであるが、②の機能に関しては、寺院の運営者の意向に依存しており、一見、無くとも寺院としては成立するように見える。小谷みどり氏の「寺院とのかかわり」寺院の今日的役割とは」において³⁵、対象が四〇歳から六九歳に限定されているとはいえ、「寺院を訪れた理由（複数回答可）」において、①に関連する「お墓参り」が六二・八%、「法事」が三〇・五%となっており、②に関連する「講演会、縁日、音楽界などの行事」が二八・九%として挙げられている程度で、①に関連する目的で寺院に足を運ぶ割合が多い傾向にあるのも事実である。しかし、①の機能ばかりに偏り、②の機能を軽視するようでは、寺院という「場」を有効活用することができていないと考える。

大谷栄一氏は『ともに生きる仏教―お寺の社会活動最前線』において³⁶、寺を開いて地域の課題や社会活動を行うことは世俗化だと批判する声もあるが、そうした社会活動を通して地域との関係を見直し、新たな宗教的ケアやサポート、檀信徒とのつながりをうみだしたり、寺を開くことで地域におけるさまざまな立場の人々が協力しあう地域づくりの拠点、つまり本考察において何度も述べてきた³⁷となり得る場だとしている。また、その事例として「サラナ親子教室」が挙げられている。「サラナ親子教室」のHPの紹介文は、以下の通りである³⁷。

同じ境遇の母親どうしがつながり悩みを語り合うことで、さまざまな気付きを得て、前向きな気持ちで育児に取り組めるようになってもらいたいと思います。このような子育ての場として、最適なのがお寺です。仏

さまのご加護を願って手を合わせるなかで、母子ともに安らかな心が育まれていくことを願います。

ただ子育ての支援をするだけなら、寺院以外の場でもできる。しかし、非日常性や宗教性を伴う寺院において取り組むことで、スピリチュアルな癒しや仏法という心の支えによる差別化に成功している。

また、ネット上という「場」においても興味深い事例がある。他力本願・ヨマというサイトには、「僧侶の部屋」というコンテンツがあり、「生活の様々なお悩み投稿に、僧侶達が座談会風にお応えします」紹介されている³³。この「僧侶の部屋」では、サッカー僧侶や愛犬僧侶など、個性豊かな僧侶たちが投稿者の悩みについて話し合い、解決策を模索していく形式となっている。浄土真宗本願寺派が運営するサイトだが、仏教用語が用いられたり、直接、仏教の話へ誘導するという形式はとられておらず、「宗教臭さ」が感じられないようになってきている。このことは、教義を直接伝えるものではないので、一見すると、伝道活動として見ると効果は薄いように感じられるかもしれない。しかし、僧侶という存在との間の壁を壊したり、仏教・真宗に親しむきっかけ、第一歩としての効果は期待できる。何より、ネット上で誰もが相談を投稿することができるといふ点に大きな意義があると考えられる。第二章の第二節でふれた、真宗教団連合による調査結果でも挙げたように、「インターネットやSNSの中では本音を出せる」という人が、二〇代〜三〇代に集中しているという点からも、ネット世代の若者を対象とした場合、「僧侶の部屋」のような、ネット上でのお悩み相談の場が必要とされる時代になったといえるだろう。

これまで、伝道活動の事例を挙げながら、今後の伝道活動に活かすべき点や課題点を見てきた。しかし、例えば全ての寺院が規模の大きい活動をすることは現実的ではないし、子供が少ない地域で子供をメインターゲット

とした「ジッセンジャープロジェクト」のようなヒーローショーを開催することは、その地域に適した活動とはいえないだろう。地域の特性・寺院の規模・時間的余裕などは寺院によってさまざまなので、大きな活動を行うことができる寺院もあれば、そうでない寺院も存在する。しかし、その差を補う手段はいくつも考えられる。

例えば、縁日などの比較的広い場所を必要とする催しをしてみたいが、寺院内の敷地が狭い場合は、寺院同士の連携で、他の寺院の場所を借りたり、別院などの施設を利用する方法が考えられる。こうすることで、違う寺の門徒同士、僧侶同士の新たな関係が生まれる場や、寺院の活動を宣伝する場としても期待できる。

また、時間をつくるという意味では、寺院のICT化やキャッシュレス、クラウドの導入も有効な策の一つだと曹洞宗慈願寺の柴原幸保氏は話す³⁹。柴原氏は、寺院のICT化により、檀家管理の効率化、檀信徒と法事の日程の打ち合わせや、住職との面談の打ち合わせなどを行うことができるコミュニケーションアプリの開発が期待できるとし、ウェブサイトだけでなく、SNSやアプリといった新しく多様なツールを用いることが大切だと主張している。また、キャッシュレスやクラウド会計ソフトを導入することで、金銭の管理、仕訳の手間が大幅に軽減され、そのぶんの時間を他の活動に充てることができるという⁴⁰。「テクノ法要」という電子音楽を法要に用いる取り組みをしている浄土真宗本願寺派福井教区一乗組照恩寺は、テクノ法要に必要なソフトウェアや照明設備はクラウドファンディングで集めた金で購入したという例もある⁴¹。ネット上にも伝道活動の手助けとなるさまざまなツールがある現代では、それらを使いこなす手腕が伝道者には求められている。

他にも、伝道活動を試してみたいが、どのようにすればいいのか分からない場合や、初めてで不安だという僧侶

もいるだろう。そのような僧侶に向けた取り組みとして、浄土真宗本願寺派の「子ども・若者ご縁づくり」がある。「子ども・若者ご縁づくり」のホームページに記載されている活動概要は以下の通りである⁴²。

「子ども・若者ご縁づくり」とは、「青少年教化活動」そのもののことです。全寺院で推進している「キッズサンガ」をさらに展開すると共に、特に若者層（中学生・高校生・学生・社会人など）への働きかけを強めていこうとするものです。年齢や地域などそれぞれのおかれた状況を把握し、若者も手を合わせお念仏申すご縁を「つくり」、そのご縁を「つなぎ」、そして「深める」ことに取り組んでいきます。

同サイト内には、「子どもの集い」を開催したい寺院の手助けとなるように、企画のマニュアルもサイト内に掲載されており、伝道活動を始めたい僧侶のサポートが行われている。

結論

現代における日本人の多くは、宗教に関連する年中行事、日常会話、文化に囲まれた生活を送っているいつばうで、宗教への信仰心や教団への所属意識が低い傾向にある。しかし、宗教には多くの可能性がある。それは時に文化の一部として生活を豊かにし、死別の苦しみの中で心の支えとなったり、心が安らぐ居場所を与えてくれるなど、人付き合いに対して複雑な感情をもっていたり、競争のストレスに悩まされるような現代の日本社会を

「生きやすく」する可能性である。そして、その宗教の教えをひろめるのが、伝道者と呼ばれる存在である。

浄土真宗における理想的な伝道者とは、同朋・同行の仲間とともに、阿弥陀仏の仏徳を讃嘆し、浄土真宗のみ教えを聴聞する者たちの模範的存在である。浄土真宗においては、「ジッセンジャープロジェクト」、「グチコレ」、「僧侶の部屋」など、非常にアイデアに富んだ活動で伝道者が活躍している。その一方で、専門用語の問題、活動内容の検討の課題、さらには、僧侶や寺院の課題も少なくない。その中には伝道者が心を改めればすぐに改善できるものもあれば、伝道者自身の修学・研鑽を要するものなど、改善が困難なものも存在する。

現代ではインターネットやSNSの普及によって、今まで知られていなかった活動が認知されたり、伝道活動の事例を紹介する書籍や研究も増えている。なかには宗教が異なっている場合や、宗派が違うものも当然含まれているが、そのような違いを気にせず、見習うべき点はどんどん吸収していくべきである。そして参考にする際は、活動の内容や、活動拠点には長所と短所が存在する関係上、伝道活動の場をどこに設けるか・メンテナンス層の設定・教えにそった活動内容か・継続性があり、効果が見込めるか、の四点を検討することが重要である。

また、伝道活動の助けとなるツールもたくさんある。現代では、SNSやクラウドなどの最新技術や、「子ども・若者ご縁づくり」のような伝道活動をスタートしたい僧侶をサポートする宗派の取り組みなどがある。それらのツールの有効活用に加え、時代によって宗教や伝道活動の内容へのニーズが変わり、最新の技術も日々世の中に出てくる現代では、伝道者はより社会の情勢に敏感になる必要があるだろう。

註

- 1 二〇一三年から龍谷大学の実践真宗学研究科によって展開されている、ヒーローショーを通じて仏教を伝えていく活動。(他力本願 http://tarikihongwan.net/soucial_network/9375.html 二〇二〇年一月五日参照。)
- 2 影山教俊『寺と仏教の大改革』、国書刊行会、二〇〇九年、二二頁。
- 3 吉川順弘『神と仏の明治維新』、洋泉社、二〇一八年、三一四頁。
- 4 文化庁 宗教年鑑平成三〇年版

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/pdf/h30nenkan_gaiyo.pdf 二〇一九年十一月十一日参照。

- 5 井上順孝『現代宗教事典』、弘文堂、二〇〇五年、二二六―二二七頁。
- 6 ジョン・R・ヒネルズ『世界宗教事典』、青土社、一九九一年、二〇〇―二〇一頁。
- 7 友久久雄・吉川悟編『仏教とカウンセリングの意義 悩みに対する宗教的・心理的アプローチ』、自照社、二〇一六年、四頁。
- 8 井上順孝『宗教社会学がよくわかる本』、秀和システム、二〇〇七年、一八一―一九頁。
- 9 二〇〇八年に制作された松竹の日本映画。小林大悟という男性が納棺師としてさまざまな死と向き合い成長していく物語。第八一回アカデミー賞で、日本映画史上初の外国語映画賞を受賞した。(映画.com

<https://eiga.com/movie/53337/> 二〇二〇年一月五日参照。)

10 一九九五年にテレビ東京系列で放送された、庵野秀明監督によるSFロボットアニメ。使徒と呼ばれるキャラクターに、アダムやリリスなどといった聖書に由来する名称が用いられている。

(映画.com <https://eiga.com/official/evangelion/character/> 二〇二〇年一月五日参照。)

11 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』、弘文堂、二〇一二年、一二七頁。

12 加藤智見『見つめ直す日本人の宗教心』、原書房、二〇〇六年、一八一頁。

13 星野哲『「定年後」はお寺が居場所』、集英社、二〇一八年、三四―三五頁。

14 星野哲『「定年後」はお寺が居場所』、集英社、二〇一八年、三五―三六頁。

15 寺川幽芳「日本人の宗教意識と浄土教」、龍谷大学 真宗学会『真宗学第一一・一一二合併号』平成一七年三月、五一―九頁。

16 加藤智見『見つめ直す日本人の宗教心』、原書房、二〇〇六年、六五―六八頁。

17 加藤智見『見つめ直す日本人の宗教心』、原書房、二〇〇六年、二四七頁。

18 真宗教団連合 第二回 浄土真宗に関する実態把握調査 (二〇一八年度) 結果報告書 (概要編)

<https://www.shin.gr.jp/activity/event/800/pdf/report2018.pdf?0129> 二〇一九年十一月一日参照。

19 NHK放送文化研究所 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか―ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から―

https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf 二〇一九年十一月一日参照。

20 NewSphere 日本人の宗教観、海外と違うけど変じゃない？米メディアが探る日本人の心根

<https://newsphere.jp/national/20150922-1/> 11019年11月11日参照。

21 NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造「第八版」』、NHK出版、2015年、1321—139頁

22 真宗教団連合 浄土真宗に関する実態把握調査（2017年度）

<https://www.shin.gr.jp/activity/event/800/pdf/report2017.pdf> 11019年11月11日参照。

23 深川宣暢 「真宗伝道学方法論の考察—真宗教義と伝道学の方法—」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一一九・二〇合併号』、1321—135頁。

24 深川宣暢 「真宗伝道学方法論の考察—真宗教義と伝道学の方法—」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一一九・二〇合併号』、133—134頁。

25 葛野洋明 「現代における真宗伝道の課題」龍谷大学 佛教文化研究所紀要第五〇集創設五〇周年記念特集号、七八頁

26 葛野洋明 「真宗伝道の実践研究—国際伝道の実状から窺う—」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一二三・一二四合併号』、138—139頁。

27 寺川幽芳 「日本浄土教の画期をめぐって」龍谷大学 真宗学会 『真宗学第一〇九・一一〇合併号』、三九頁。

28 葛野洋明 「現代における真宗伝道の課題」龍谷大学 佛教文化研究所紀要第五〇集創設五〇周年記念特集号、七七八二頁。

- 29 真宗教団連合 第二回 浄土真宗に関する実態把握調査（二〇一八年度） 結果報告書（概要編）
<https://www.shin.gr.jp/activity/event/800/pdf/report2018.pdf?0129> 二〇一九年十一月一日参照。
- 30 真宗教団連合 浄土真宗に関する実態把握調査（二〇一七年度）
<https://www.shin.gr.jp/activity/event/800/pdf/report2017.pdf> 二〇一九年十一月一日参照。
- 31 加藤智見 『見つめ直す日本人の宗教心』 原書房、二〇〇六年、二二三頁。
- 32 他力本願.net グチコレ <http://tarikihongwan.net/collecion/12139.html> 二〇一九年十二月一日参照。
- 33 他力本願.net <http://tarikihongwan.net/unique/2629.html> 二〇二〇年一月五日参照。
- 34 浄土真宗本願寺派総合研究所編 『寺院活動事例集ひろがるお寺く寺院の活性化に向けて』、宗門長期振興計画推進対策室、二〇一三年、九四頁。
- 35 小谷みどり 「寺院とのかかわり、寺院の今日的役割とは」
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/Idi/note/notes0910a.pdf> 二〇一九年十二月一日参照。
- 36 大谷栄一 『ともに生きる仏教―お寺の社会活動最前線』、筑摩書房、二〇一九年、一〇九―二二〇頁。
- 37 サラナ親子教室 サラナ親子教室とは <https://sarana.site/about/> 二〇一九年十二月一日参照。
- 38 他力本願.net 僧侶の部屋 <http://tarikihongwan.net/category/advice/> 二〇一九年十二月一日参照。
- 39 『仏事二〇一九年三月号』、鎌倉新書、二〇一九年一月号、九〇―九一頁。
- 40 『仏事二〇一九年一月号』、鎌倉新書、二〇一九年一月号、九二―九三頁。

41 浄土真宗本願寺派 重点プロジェクト推進室 『御同朋の社会をめざす運動』（実践運動）実践事例集二』、浄

土真宗本願寺派 重点プロジェクト推進室、二〇一九年、三六頁。

42 浄土真宗本願寺派 子ども・若者ご縁づくり <http://kids-sangha.hongwanji.or.jp/> 二〇一九年十一月

日

参照。

参考文献

書籍

- 『浄土真宗聖典―註釈版 第二版―』本願寺出版社、二〇一三年
- 浄土真宗本願寺派 重点プロジェクト推進室『「御同朋の社会をめざす運動」(実践運動)実践事例集二』
浄土真宗本願寺派 重点プロジェクト推進室、二〇一九年
- 『仏事』鎌倉新書、二〇一九年一月号
- 『仏事』鎌倉新書、二〇一九年三月号
- 大谷栄一『ともに生きる仏教―お寺の社会活動最前線』筑摩書房、二〇一九年
- 星野哲『「定年後」はお寺が居場所』集英社、二〇一八年
- 加藤智見『見つめ直す日本人の宗教心』原書房、二〇〇六年
- 島菌進『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂、二〇一二年
- 井上順孝『宗教社会学がよくわかる本』秀和システム、二〇〇七年
- 友久久雄・吉川悟編『仏教とカウンセリングの意義 悩みに対する宗教的・心理的アプローチ』自照社、二〇一六年
- 影山教俊『寺と仏教の大改革』国書刊行会、二〇〇九年
- 吉川順弘『神と仏の明治維新』洋泉社、二〇一八年

上田紀行『がんばれ仏教！』NHK出版、二〇〇四年

『目覚めよ仏教！』NHK出版、二〇〇七年

高橋卓志『寺よ、変われ』岩波書店、二〇〇九年

浄土真宗本願寺派総合研究所『ひろがるお寺く寺院の活性化に向けてく』宗門長期振興計画推進対策室、二

〇一三年

浄土真宗本願寺派『宗報』本願寺出版社、平成三一年三月号・四月号、平成三〇年一月号く四月号・六月号

・七月号・九月号

NHK放送文化研究所『現代日本人の意識構造「第八版」』NHK出版、二〇一五年

辞書

井上順孝『現代宗教事典』弘文堂、二〇〇五年

ジョン・マ・ヒネルズ『世界宗教事典』青土社、一九九一年

論文

寺川幽芳「日本人の宗教意識と浄土教」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一一一・一一二合併号』平成一七年

三月

「日本浄土教の画期をめぐって」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一〇九・一一〇合併号』平成一六年三月

葛野洋明「真宗伝道の実践研究―国際伝道の実状から窺う―」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一二三・一二二四合併号』平成二三年三月

葛野洋明「現代における真宗伝道の課題」龍谷大学 佛教文化研究所紀要第五〇集創設五〇周年記念特集号 平成二三年一二月

葛野洋明「浄土真宗における伝道活動の実践的研究―統計調査・実地調査を踏まえて―」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一二七号』平成二五年三月

深川宣暢「真宗伝道学方法論の考察―真宗教義と伝道学の方法―」龍谷大学 真宗学会『真宗学第一一九・一二〇合併号』平成二一年三月

参考URL

應典院 <https://www.outenin.com> 二〇一八年一月二二日参照。

仏教ウェブ入門講座 <https://true-buddhism.com> 二〇一八年一月二二日参照。

京都坊主BAR <http://bozu-bar.jp> 二〇一八年一月一四日参照。

実践真宗学研究科のブログ <https://jissenshinshu.wordpress.com> 二〇一八年一月一五日参照。

龍谷大学 実践真宗学研究科 https://www.ryukoku.ac.jp/faculty/graduate/practical_shin/ 二〇一八

年 一二月一五日参照。

浄土真宗本願寺派総合研究所 <http://j-soken.jp/> 二〇一八年十二月十五日参照。

文化庁 宗教統計調査 平成二九年度 全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数

<https://www.e-stat.go.jp/stat->

[search/files?page=1&layout=data1st&toukei=00401101&kikan=00401&tstat=000001018471&cycle=0&class1=0000011111515&stat_infid=000031662954](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=data1st&toukei=00401101&kikan=00401&tstat=000001018471&cycle=0&class1=0000011111515&stat_infid=000031662954) 二〇一八年十二月十七日参照。

全日本仏教会 <http://www.jbf.ne.jp/> 二〇一九年七月二〇日参照。

文化庁 宗教年鑑平成三〇年版

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/hakusho_nenjihokokusho/shukyo_nenkan/pdf/h3onenkan_gaiyo.pdf 二〇一九年十一月十一日参照。

真宗教団連合 浄土真宗に関する実態把握調査（二〇一七年度）

<https://www.shin.gr.jp/activity/event/800/pdf/report2017.pdf> 二〇一九年十一月十一

日参照。

真宗教団連合 第二回 浄土真宗に関する実態把握調査（二〇一八年度） 結果報告書（概要編）

<https://www.shin.gr.jp/activity/event/800/pdf/report2018.pdf?0129> 二〇一九年十一月

月一日参照。

NHK放送文化研究所 日本人の宗教的意識や行動はどう変わったか？ISSP 国際比較調査「宗教」・日本の結果から」

https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190401_7.pdf 二〇一九年十一月十一日参照。

NewSphere 日本人の宗教観、海外と違うけど変じやない？米メディアが探る日本人の心根

<https://newsphere.jp/national/20150922-1/> 二〇一九年十一月十一日参照。

小谷みどり「寺院とのかかわり」寺院の今日的役割とは」

<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/Idi/note/notes0910a.pdf> 二〇一九年十一月十一日参照。

サラナ親子教室 サラナ親子教室とは <https://sarana.site/about/> 二〇一九年十二月十一日参照。

他力本願.net <http://tarikihongwan.net/> 二〇一九年十一月十一日参照。

浄土真宗本願寺派 子ども・若者ご縁づくり <http://kids-sangha.hongwanji.or.jp/> 二〇一九年十二月十一日参照。